

特集

加算算定までつなげる！

外来がん治療の「病-薬連携」

特集にあたって

がん領域における薬物治療（化学療法）は、新規医薬品の開発による治療技術の進歩、患者のQOLの向上、医療費の削減、医療機関のリソースの有効活用、患者からのニーズなどの理由により入院から外来へ大きくシフトしています。

そのような背景のなか、病院と薬局が連携し、より効果的な医療サービスを提供する取り組みが注目されています。この「病-薬連携」は、患者の治療効果や安全性を向上させるだけでなく、医療コストの削減にもつながる画期的なアプローチです。

効果的な病-薬連携を行うためには、①アドヒアランスの評価、②副作用の評価、をいかに効果的に実施できるかが薬剤師に欠かせないスキルとなります。アドヒアランスの評価では、治療の進行や予後、副作用の管理方法などについて、患者や家族に適切に説明し、治療に対する不安や疑問を解消することが重要です。また、副作用の評価では、有害事象共通用語規準（CTCAE）を活用した副作用重症度評価によるグレード分類が用いられ、その判定により休薬、減量、中止などが決定します。

これらのスキルを駆使して課題解決に取り組むことにより、多職種からなるがん治療において薬剤師の存在価値がさらに向上することにもつながると考えています。

そして、診療報酬上では、患者のよりよい治療成果を目指し外来がん治療の質を向上させる観点から、連携充実加算、特定薬剤管理指導加算2が設置されており、病院および保険薬局それぞれで算定が可能となっています。

病-薬連携の重要性は、患者の病状や薬物療法に関する情報を双方向で共有することにあります。病院での診断や処方に基づいて薬局が適切な薬剤を

調剤し、患者に正しい服薬指導を行うことで、治療の効果を最大化し副作用を最小限に抑えることが可能となります。

このように、病-薬連携は医療現場全体の連携強化や、患者中心の医療提供に向けた重要な取り組みであるといえます。今後も情報技術の進化や医療制度の改革を踏まえながら、病-薬連携の推進により、より質の高い医療サービスを提供し、患者の健康増進に貢献していきたいと考えます。

本特集の企画では、診療報酬・調剤報酬改定で期待されている薬剤師の役割を今後さらに発展させるにはどうしたらよいかを考える契機として、また実践する指針として、がん薬物療法分野にてご活躍の先生方に、外来がん治療に介入するポイントや注意点、病院から提供される情報の活かし方、薬局から病院へ患者情報をフィードバックするコツなどを解説していただきました。

病-薬連携を推進するとともに連携の質向上を目指し、よりよい治療を患者に提供できるように取り組むための参考としてご活用いただければ幸いです。

がん研究会有明病院 院長補佐／薬剤部長

山口 正和